米花町奇談・・・巨大化編

なんじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
米花町奇談・・・巨大化編

【Ｎコード】
Ｎ２３４６Ａ

【作者名】
なんじ

【あらすじ】
何事も無い日曜日。退屈しきっていたコナンは、蘭から阿笠邸へのお使いを命じられる。蘭は、少年探偵団と、コナンがケンカしていると誤解しているようだが・・・。そして、コナンは、阿笠邸を訪ねる途中、「強盗殺人犯」を捜索中の、佐藤、高木亮刑事に出会う。

1．コナンの苦悩

日曜の午後だった。
遊ぶ約束もなく、読む本もない。
コナンは、小五郎と一緒に面白くもないテレビ番組をぼんやりと眺めていた。
台所から甘い香りが漂ってくる。
”今日のおやつかなあ～。うれしいな～。”
知らず知らず、期待に胸をふくらませてしまったコナンは、我に返った。
”おいおい、これじゃ本当の小学生だよ”
体だけでなく頭脳まで小学生になるのを防ぐため何かしなくては、と、コナンは思い立ちあがった。
　蘭が台所から姿を現した。きれいにリボンを結んだ箱を持っている。
「コナン君、これ阿笠博士の所に持っていって。クッキー焼いたの」
「うん、いいよ。でも、お見舞いなんでしょ。いっしょに行こうよ」
　阿笠博士は数日前、公園で元太達とサッカーをして足を傷めた。
その結果、蘭の肩を借りて帰宅する羽目になった。
蘭はそのことを心配しているのだと、コナンは思った。
しかし、蘭は首を横に降った。
そしてコナンが思いもかけない事を聞いた。
「コナン君、今日少年探偵団の皆と遊ぶ約束をしてないでしょう？」
コナンはうなずくしかなかった。
蘭が何を言おうとしているのか見当がつかなかった。
「お昼に、コンビニに買い物に行ったら、
少年探偵団の皆がお弁当買っていたの。
話を聞いたら、博士の家の庭でピクニックするんだって。
でも、皆、私に会ってすごく後ろめたそうだったの。」

蘭は小さくため息をついた。
それから声の調子を、わざとらしく明るくした。
「だからね、おやつにクッキー持っていって、コナン君。
誘われてなくっても、お菓子を持っていけば、追い返されたりしないわよ」
「へえ～、コナン～。おめえ、生意気すぎて、とうとう、仲間はずれにされたな」
「お父さん！！」
小五郎をにらみつけた蘭は、コナンに優しく話し掛けた。
「言葉って、ほんのちょっとした事で、行き違う事もあるわ。
思い切って皆の所に遊びに行ってごらんなさい。コナン君」

”蘭は誤解している”
阿笠博士の家へと歩きながら、コナンは思った。
大体、小学一年生とじゃ、けんかになりようがない
。元太達がコナンを外して集まったのは、
きっと何か妙な事件に首を突っ込むつもりなのだろう。
コンビニ弁当は、阿笠博士のうちで食べるのではなく、
聞き込みに回っている途中の公園ででも食べるのだろう。
　コナンは眼鏡の追跡装置のスイッチを入れた。
子供達が危険な目に会うかもしれないのを放っては置けない。
”あいつらそもそも危険がわかってないもんな”
しかし、追跡装置は沈黙したままである。
どうやら全員バッチの電源を切っているようだ。
”それじゃあ、事件とかじゃないのかな？
いや、たいていの時はバッチの電源入れてるよな。
　それとも、俺に見つからないように電源を落しているのか？
いや、まさか、そんな・・・”
コナンは自分の疑惑を打ち消そうと笑ってみた。

しかし、笑いは力なく消えていった。
”そう言えば、昨日元太が
『このごろ、俺ちょっと、やせただろう』なんて言った時、
『前より太ってるぜ』って、言っちまった。
あいつ、ちょっと残念そうだった。
まあ、真実って時に残酷なんだよな。
けど、光彦だって同じような事を元太に・・・・
　そうだ、光彦。
事件の事を話している時に、自慢そうに『冤罪（えんざい）』のことを、
『それは「せんざい」って言うんですよね』
なんていうから、我慢しきれず、思いっきり笑っちまった。
光彦の奴、だいぶ傷ついた顔してたな。
　でも、その後の、灰原のセリフの方がキツかったぞ。
「円谷君、それって『濡れ衣』を引っ掛けた、高度のシャレなのよね」
もっとも、光彦には、皮肉は通じてなかったな。
灰原に、礼を言ってたから。
　大体、歩美ちゃんだって、笑ってた・・・そうだ、歩美ちゃん・・・。
昨日、歩美ちゃん、うれしそうに、新品のブランド物だとか言うカチューシャを、
つけてきてて、俺に、どう思う、って聞いたっけ。
俺、つい、「前のカチューシャとどうちがうんだい？」なんて聞いちまった。
灰原は、ものすごく褒めてたけど、俺が、あまり感心しないから、
歩美ちゃん、ちょっと不満そうだったな。
　だって、色が同じで、まん中に細い線が入ってるだけの違いだぜ。
でも、やっぱり、俺は高校生。どう思おうと、とにかく褒めるべきだったかな。
　ああ、思ったことそのまんま言っちまうなんて、ほんとに小学生

だぜ”。
突然、コナンはクラクションの音に包まれた。
周りを見回すと、いつの間にか、交差点のまん中に立ち止まっている。
そして、歩行者側の信号は、赤に変わっている。
慌てて、コナンは横断歩道を渡りきり、歩道を歩き出した。
”とにかく、歩美ちゃんの機嫌を損ねたとなると、かなりまずい事になるような気がするなあ”

2. 遭遇

今度は、呼びかけるようなクラクションが鳴った。
コナンが立ち止まると、車がよってきて止まり、
助手席から、佐藤刑事が顔を出した。
「名探偵君、いくら難事件を抱えているからって、
交差点のまん中で立ち止まって考え込んじゃあダメよ」
コナンは車を覗き込んだ。運転席には高木刑事もいる。
「佐藤刑事、高木刑事。さっきの見てたんだ」
佐藤はコナンを、からかうように話し掛けた。
「危なかったわよ。コナン君。
これじゃあ、事件の捜査の前に、
由美に交通指導しっかりしてもらった方がいいかもね」
コナンは苦笑した。そして真顔になっていった。
「佐藤刑事達は、事件なの？」
「ま、そんな所ね」
仕事の事は、子供には、話さないぞ、という表情で、佐藤は言った。
　コナンは考えた。
もしかすると、この事件に元太達が絡んでいる可能性もある。
佐藤刑事は、素直に話してくれそうも無い。
コナンは、高木刑事を攻めてみる事にした。
「高木刑事、仕事の振りして、本当は二人で、デートなんだ」
笑顔、かつ、大声のコナンの言葉に、二人の刑事は顔を赤らめた。
とどめを刺す為、コナンは言葉を加えた。
「図星でしょう」
二人の刑事は、車から降てきた。
「ち、違うよ、コナン君。本当の本当に事件なんだ」
大慌てで言う高木に、佐藤も、コナンの前に屈み込み、
いささか冷静さを欠いた口調で付け加える。

「強盗殺人の被疑者を追っているのよ」
「そ～かなあ？二人とも、ちっとも怖い顔もしてないし。やっぱりデー・・・」
「違うんだってば！」
大声で、言った後、頭をかきながら、高木は佐藤に話しかけた。
「でも、やっぱり、僕ら、コナン君にわかっちゃうくらい緊張感欠いているんですね」
佐藤も、苦笑した。
「そうねえ、『うなぎのサブ』が被疑者ですもんね」
「『うなぎのサブ』って？」
好奇心で、はちきれんばかりの声をしてコナンは聞いた。
その声に、話を聞くまでは後に引かない気配を感じ取ったのか、佐藤は話し始めた。
「『うなぎのサブ』というのは、昔からの窃盗犯なの。
本名は寒川　次郎。
閉め忘れた小窓とか、ちょっとした、家の隙間から入り込んで泥棒するの。
そして、家の人を起こすことなく静かに盗むもので、
ついたあだ名が『うなぎのサブ』
　別に、鍵を開ける技術がある訳でもなし、
手袋もはめずに盗みをするんで、すぐつかまっちゃう。
出所しても、開いた窓があるとつい、入り込んで盗んでしまうの繰り返し。
怪盗キッドとは、別の意味で二課の常連さんだったわけ」
「じゃあ、なんで、今回は、一課が追っているの？」
高木刑事が、答えた。
「金曜の夜、杯戸町で、強盗殺人が起こったんだ。
タンスから、現金が盗まれ、同じ部屋で眠っていた老人が頭に傷を負って亡くなった。
そして、側に血のついた壷が転がっていて、そこからは寒川の指紋

が検出された。
それで、最初は、寒川が、金を盗ろうとして、
家人に見つかり、壷で思わず、殴り殺したんだろう、と考えられたんだ。
でも、家の人の話や、鑑識結果から、なんだか、強盗殺人の線が怪しくなってきた。
家の人は、「クモだ！」の大声で、飛び起きて、
次に「しまった、人を殺しちまった！」って、叫び声を聞いている。
部屋には、老人の遺体の横にクモの死骸も確かにあった。
殺された老人は、御年１０１歳で、寝たっきり。
耳が遠くて、寒川が入ってきたから目が覚めたとは考えにくい。
いっしょに眠っていた９０歳の奥さんも、耳が遠くて、
この人は、騒ぎにも関わらず、家の人に起こされるまで起きなかったくらいだから。
そして、殺された老人の死因は解剖結果、「心不全」。
頭の傷は、死因になるほどの物でないし、その上、生活反応に乏しい。
それで、監察医の言う事には、
老人は、壷をぶつけられる前に、すでに亡くなっていた、
という方が、可能性が高い、って」
佐藤が、高木の後を引き取った。
「正確な所は、もう少し検査に時間がかかるのだそうだけど、
寒川を知っている刑事は皆こう推理しているの。
『亡くなっているからこそ、老人の顔の上をクモが這った。
それを見た虫嫌いの寒川は、クモの下の老人のことなんか、
頭に無く、思わず、壷をぶつけちまったんだろう。』」
コナンは、自分の緊張感も無くなって来るのを感じた。
どう考えても、元太達が関わっていそうに無い。
「その人、そんなに虫が嫌いなの？」
「虫が嫌いというより、気が小さいのかなあ？

確か、僕が聞いた話じゃあ、以前、家宅侵入した家で、転んで、指を切って、
血が止まらないからって慌てた挙句、
家の人をわざわざ起こして、救急車呼んでもらったそうだから」
高木が言うと、佐藤も、付け加えた。
「虫嫌いは、確かでしょうね。
前回か、前々回捕まった時は、常夜灯の周りを飛んでいる蛾に驚いて、
悲鳴をあげてしまったのが原因だそうだから。
なんにせよ、故意に人を殺せるタイプじゃない様ね。
目暮警部曰く
『奴さん、自分のしでかした事に、びびりきっているぞ。
どうして良いか、わからなくなって、
きっと、どこかの、公衆トイレか、工事現場の片隅に隠れて、震えてるはずだ。
前のお勤めのとき、高血圧やら、糖尿病やらで、
医者から、注意を受けているそうだし、年も年だ。
本人のために早く、保護してやらんと』」
「日曜なのに、大変だね。刑事さんたちも」
二人の刑事は、そろって苦笑いをした。
「さて、コナン君。君の方の難事件を聞かせて欲しいわ」
佐藤刑事が、楽しそうに、コナンの方に顔を近づけた。
コナンは、一瞬ためらったが、隠す理由も無いので、今までのことを二人に話した。
両刑事は、まじめに話を聞いているふりをしていた。
しかし、探偵であるコナンには、
二人が必死に笑いをこらえているのが手にとるように分かった。
それでも、コナンの話を聞き終わると、二人は、きわめて真面目な顔で言った。
「コナン君、それは、歩美ちゃんだけの問題じゃないと思うわ」

「そうだよ。でも、昨日はごめん、って謝れば、すぐ仲直りできるよ。
元太君たちは根に持つタイプじゃないし」
　両刑事は車に戻った。
「じゃあ、お互い、早く”事件”を解決しましょうね」
明るい佐藤の声を残して、車は去っていった。
コナンは、去り行く車の中から、我慢していた二人の笑い声が開放されて、
はじけるのが聞こえるような気がした。
　「まあ、いいや」
コナンは、独り言を言うと、再び、阿笠博士の家へ向かって歩き出した。
　しばらく、歩くと、前方の角から、見覚えのある人影が出て来た。
重そうな袋を下げて、歩いている。
「歩美ちゃん?！」
コナンの声に歩美は振り返った。
その表情は、いつもコナンに出会った時に見せてくれる、
太陽のような笑顔ではなかった。ひどく、驚いたような、怯えたような・・・、
コナンがその表情を完全に読み取る前に、歩美は、逃げるように駆け出した。

3．疑惑の午後

コナンは唖然として、走り去ろうとする歩美を見つめた。
歩美は、必死に走ろうとしているが、
袋がかなり重いらしく、その成果が上がっていない。
その挙句、自分の下げた袋につまずいて、転んでしまった。
　コナンは我に返って、歩美の元に駆け寄った。
「大丈夫？歩美ちゃん」
コナンは歩美を助け起こした。
歩美は何も言わず、コナンから離れると、道に散らばった物を拾い始めた。
「俺も手伝うよ」
コナンは横目で、歩美の様子を伺いながら、言った。
しかし歩美はコナンの方を見もしない。
コナンは道に落ちている物の方に注意を向けた。
”何だ？鎌？それも、のこぎり状の歯がついている奴だ。
それに歩美ちゃんが今拾ったのは、小型の、のこぎり。
鎌が、三丁。のこぎり１丁。
一体何に使うんだ、こんな物？”
　無言のまま歩美は、のこぎりを袋に入れた。
その時歩美の手のひらがちらりとコナンに見えた。
バンソコウを貼っている。それも両手のひらに、だ。
「歩美ちゃん。どうしたんだ、その手。怪我したのか？」
歩美は慌てて手を握り締めた。
コナンは、いささか乱暴だと思いながらも、その手を無理やりこじ開けた。
そして、驚きの声をあげた。
「あ、歩美ちゃん。手のひら、まめだらけじゃないか、一体どうしたんだ」

歩美は何も答えない。
うつむいたまま、袋を持つと、再び歩き出そうとした。
コナンはその肩をつかんで自分の方を向かせた。
しかし、歩美はコナンと目を合わせようとはしない。
「ねえ、歩美ちゃん。困った事が起きたのかい？
元太達はどうしたんだい？
阿笠博士に何かあったのかい？」
無言の歩美を前に、コナンは必死で何が起こっているのか推理しようとした。
不吉な考えがコナンを襲った。
”まさか、黒の組織？？
灰原や阿笠博士が殺されて、その処理に、のこぎりが必要になって、
元太達を人質にして、歩美ちゃんに買いに行かせた？
そんな、馬鹿な。
もしそうなら、こんな子供を、のこのこ外には出さねぇだろうし、
そもそも、何で鎌なんか必要なんだ。
それに、歩美ちゃんの手のまめ。一体なんで？
草刈りっつても、博士の庭にはそんなに草は生えてねぇしな。
だめだ、見当がつかねぇ”
この状況で、昨日の事を根に持っているとも思えない。
しかし、コナンは、歩美に昨日の事を謝ってみる事にした。
「あ、あの、歩美ちゃん。昨日はほんとにごめんよ。
気を悪くさせちゃって。
俺、本当に、あの・・・」
歩美がやっと、コナンの方を見た。
「あのね、皆で、コナン君には内緒にしようって約束したの。
だから、私から、コナン君には言えないの。
でも、コナン君が私に着いて来てくれるなら、私うれしい」
意外なセリフだった。
とにかく博士の家で、何かとんでもない事が起こっているのは

間違いが無い様だった。
「分かったよ。袋を貸して。俺が持つから」
二人は、阿笠博士の家へと向かった。

4．『失われた世界』への招待

阿笠博士の家の中へ足を踏み入れたコナンは、
しばらくの間、呆然として声も出せなかった。
力を失った手から、クッキーの箱と、鎌を入れた袋が大きな音を立てて床に落ちた。
「これでもずいぶんきれいになったんだぜ。
まあ、博士んちの鎌はだめにしちまったけど」
元太が自慢げに言った。
コナンは、阿笠博士の家に着くまでの心配が
一気に吹き飛んだ反動で怒りが湧き上がってくるのを感じた。
「火ィつけて、燃やしちまえよ」
押し殺した声でつぶやくコナンに、光彦が感心したように言った。
「コナン君が、この光景を見たらきっとそう言うって、
灰原さんが言ってましたが本当にそのとおりですね」
「大体、博士はどうしたんだ！」
コナンの怒鳴り声に哀が冷静に答えた。
「見れば分かるでしょう。部屋に閉じ込められているのよ。
窓から出ようにも、まだ足の調子が悪くて無理なのよ」
「これは、お前らや、俺の力じゃあ、どうしようもない。
大人の力を借りて機械か何かで刈り取らなきゃあ、無理だぞ！」
コナンの言葉を聞いた哀は肩をすくめ、歩美に話しかけた。
「ね、吉田さん。言ったでしょう。
江戸川君はうるさいばっかで、手を動かしてくれないから、連れてきちゃあダメだって」
「で、でも、コナン君、泣きそうな顔だったから」
自らが泣きそうになりながら、歩美が言った。
哀は興味深い事を聞いたという風な、意味ありげな笑みを見せた。
「なるほど。泣きそうだった訳ね。

じゃあ、優しい吉田さんが、負けちゃうのも無理ないわ」
「俺は、泣きそうな顔なんてしてねえって」
コナンは、慌てて話題を目の前の問題に引き戻した。
「とにかくこれは一体何なんだ！？」
　阿笠博士の家の廊下は、巨大なつる草で埋めつくされていた。
複雑にもつれ絡まるつるは小さな子供の腕の太さほどもある。
そして、タオルほどの大きさのある、つややかな緑の葉が茂っていた。
家の中は、ジャングル状態である。
「コナン君。知らないんですか。これは時計草ですよ」
コナンの知らない事を知っていた自分が、うれしいらしく、光彦は、楽しげに答えた。
「ブラジル原産のつる状にのびる植物です。
時計の文字盤によく似た花が咲くので時計草ってついたんですよ。
実は、僕んちにも、時計草あるんですよ」
能天気な光彦に皮肉をこめてコナンは言った。
「で、お前んちも、こんな状態なのか」
光彦は動じなかった。
「まさか。うちにあるのはごく普通の時計草ですからね。
これは博士が知り合いの科学者から戴いた、珍種の時計草だそうです。
　もらった時は、小さい鉢植えの行灯作りだったそうですが、
一晩で、この大きさに育ってしまったそうです」
コナンは、哀を横目で見た。
哀は平然としている。
元太が言葉を続けた。
「博士達が寝ているうちに、廊下じゅうに伸びちまったもんで、
博士と灰原は部屋に閉じ込められちまったんだ。
　でも、灰原は、何とかドアの隙間から抜け出して、
俺に助けを求めて電話をくれたんだ」

元太は自慢げに胸を張った。
「なんたって、俺は少年探偵団の団長だもんな」
コナンは心の中で思った。
”そう言えば、そうだったよな”
元太は話し続けた。
「灰原が言うには、
ただでさえ、博士が実験の失敗で近所に迷惑かけてるのに、
こんな得体の知れない物がはびこってるって、
知れたら、この町内から、追い出されちまう。
だから、大人には絶対知らせないでくれって泣きそうな声でさ」
「へえ～、泣きそうな声でねえ～」
コナンは横目で哀を見た。
哀はその視線を受け流し言った。
「江戸川君は、年取った博士と、子供の私が路頭に迷っても良いって言うのね」
「コナン君、それはひどいですよ」
光彦が口を尖らせた。
「まあ、コナン。あんまり気ィ悪くすんなよ。
おめえを呼べば、必ず大人を呼べって言うと思ったんだ。
　それにおめえ、ちっこいから、あんまり力仕事には役たたねえしな」
元太の言葉にコナンは怒りを覚えた。
「あのなあ～」
その怒りに冷水を浴びせ掛ける様に哀が言った。
「加えて、吉田さんは力仕事には向いてないけど、皆を元気づけてくれる。
反して、江戸川君は、気をくじく言葉を、言ってくれそうだったし」
元太、光彦、歩美の3人が、哀の言葉にうなずいたのが
少しばかり憎たらしく思えたコナンであった。
「分かったよ。俺、帰るわ」

そのコナンに、哀が、鎌を押し付けた。
「残念ね、江戸川君。
さっき、蘭さんから丁寧な電話があったの。
”コナン君と仲良く遊んでね”って。
今帰ったら、蘭さん、私達が、本当にけんかしてると、勘違いするわよ。
蘭さんに、これ以上の心配はかけたくないでしょう」
”これ以上・・・、新一としてかけている心配に加えて、コナンとしてまで、って事か。
ちきしょう。蘭の奴、人の苦労まで背負い込み過ぎだって”
コナンは渋々、鎌を受け取った。
「まあ、良いじゃない。江戸川君。
コナン・ドイルの『失われた世界』が現実に体験できると思えば」
「灰原、俺が目指してるのは、シャーロック・ホームズであって、チャレンジャー教授ではない」
「あの～、何のお話でしょう？」
光彦が二人の会話に何とか食い込もうと、口をはさんだ。
「コナン・ドイルはホームズ物で有名だけど、
他に、チャレンジャー教授という主人公で、冒険物も書いているの。
『失われた世界』もその一つ」
「そうなんですか、灰原さんは本もよく読まれてるんですね。
そう言えばコナン・ドイルで、『地球最後の日』とか言う話、読んだ事がありますよ。
確か、毒ガスに包まれて、地球の人類が全滅して、というお話だったかと」
「円谷君こそ、よく本を読んでるわね。
それはチャレンジャー教授物の『毒ガス帯』というお話よ」
光彦は、哀に感心されて嬉しそうであった。
「さあ、おしゃべりは止めてそろそろはじめようぜ。
歩美が新しい鎌買って来てくれたからはかどるぞ」

元太が号令をかけた。

5．『失われた世界』の真実

話し合いの結果、歩美は手のまめがひどいので、
今まで刈ったつるを焼却炉で燃やす係。
根を切らないと、どんどんつるがのびて来るので、
元太、光彦は、庭に根付いてしまった根っこを切り取る係。
そして、コナン、哀は、家の中から博士を救出する係になった。
　哀と二人きりになった、コナンは早速、真実を追求する事にした。
「おい、灰原。この状況の本当の理由は何なんだ？」
「工藤君、手がお留守になってるわよ」
哀の言葉に、あわててつる草を刈り取りながら、コナンは言った。
「探偵団に話したような、与太話を俺が信じると思うなよ」
哀は、軽く肩をすくめると話し始めた。
「ＡＰＴＸ４８６９の解毒剤の開発がうまくいかなくって、発想をちょっと変えてみたの。
　要するに、体が元の大きさに戻れば良いんだから、
作るのは、成長促進剤でも良いんじゃないかと思って。
解毒剤より、その方が、簡単そうだったし。」
思いもよらぬ、哀の大雑把な発想に、コナンは呆れて声も出せなかった。
「それで、成長促進ホルモンを主体とした、薬品を合成してみたの。
そして、正常細胞のサンプルとして、博士の、
ＡＰＴＸ４８６９の作用を受けた細胞サンプルとして、私の、
口腔粘膜の細胞を増殖させてみようと試みたんだけど結果は失敗だったわ。
どちらも、成長促進作用は見られなかった」
「よかった」
コナンの言葉に哀は不審そうに言った。
「よかった、って。工藤君、元の体に戻りたくないの？」

「いや、その薬の実験が成功してたら、水槽の中にでも、
おまえのそっくりさんがプカプカ、いっぱい浮いてる事になったんだろう。
それを想像するとちょっと不気味で」
呆れたように、哀が言った。
「工藤君。完全に分化した細胞から、簡単にクローンができるなんて思ってたの？
ドリー一匹作るのにどのくらい手間がかかってると思ってるの。
　まったく、そんなこと考えるなんて、脳みそまで、幼児化しちゃってるんじゃない？」
「ああ、そうかもな。子供らしくアニメばっかり見てるからな。
その中で、そんなシーンがあったんだよ。
そう言えば、その登場人物の声、お前の声に似てたよな」
「そうなの」
興味なさそうに、哀は言った。
「とにかく、その薬と、この状況、どういう関係があるんだよ」
「昨日の、夜の事。
フラスコに入った薬を持って、私、考えていたの。
これに見切りをつけるべきか、もう少し、研究を進めるべきか。
　そしたら、壁にゴキブリが這っていたの。
私は、思わず、フラスコを投げつけてしまった。
そこに、博士が、知り合いからもらった、時計草がたまたまあって、
薬をかぶってしまったの」
　不吉な予感を感じてコナンは聞いた。
「なあ、ゴキブリはどうなった？」
「逃げたわ。
薬をかぶったかもしれないけど、実験では動物細胞には効かなかったから、
巨大化はしてないはずよ」
”はず・・・か。なんか、嫌な予感がするなあ”

コナンの不安をよそに哀は話を続けた。
「私は、薬をかぶった時計草が枯れるんじゃないかと思って、風呂場に持っていったの。
あそこなら、高温多湿で、原産地に近い気候だから、きっと何かあっても元気になるだろう、と思って。
　でも、薬の作用に加えて、環境が良過ぎた様ね。
　夜中に、急成長した時計草は、まず風呂桶の残り湯を養分にして、繁殖した様よ。
昨日は、足が楽だからって、阿笠博士が長風呂していたわ。
きっと、博士のダシがよく出てたのね」
「ダシって、お前の方こそ、脳みそ幼児化してるんじゃあ」
　哀はコナンを横目で見て続けた。
「そして、時計草は、根を、お風呂場の窓を破って伸ばし、地面に根を下ろし、つるを廊下中に伸ばして、部屋のドアをふさいでしまったの。
すごい生命力だわ」
他人事のように、哀は感歎した。
　コナンは、自分の腕に何かが、まとわりつく気がして視線を向けた。
「何だ！これは」
公園にある時計ほどの大きさの、時計草の花がいつの間にか咲いていた。
それが、コナンの腕を花びらで包むようにしてまとわりついている。
コナンは花から腕を引き抜いた。
花はなおも、コナンの方に、ゆらゆらと自ら動いて近づいて来る。
　コナンは花を鎌で切り落とした。
しかし、周りでは、次々とつぼみが出現している。
「なんで、急に花が咲き出したんだ」
「小嶋君達も根を切っているし、そろそろ、この時計草、限界なのね。

生体の危機に対して、種族保存の本能が働いている。
つまり、花を咲かせて、種子を作ろうとしてるんだわ」
　話している間にも、花が再びコナンにまとわりつき、コナンはそれを引き剥がした。
「で、なんで、こんなに花がまとわりつくんだよ」
「進化ね。
これほど、巨大化するときっと土からの養分だけじゃあ、たりないんだわ。
　土壌の養分の少ない所に生息する、食虫植物が、昆虫で、養分を補給するように、
この時計草も、何とか他から栄養を補給しようとしてるんだわ」
「おい・・・、冗談じゃない。俺は、花の肥料にはなりたかねえぞ」
「大丈夫よ、見たところ、少しばかり、動けるだけみたいだし。
消化液を出すところまでは進化できなかったのね」
　事も無げに、言う哀を見て、コナンはふと、思いついた。
「灰原、お前本当は、黒の組織を・・・」
そこまで言ってコナンは言葉を切った。
これ以上言うと、哀の怒りをかうような気がした。
「何なの？工藤君。はっきり言ったらどう。
言いかけて途中で止めるなんて、気分が悪いわ」
「聞きたいなら、握手してくれよ」
不審な顔をしつつ、哀は右手を差し出した。
コナンはその手を握った。
”これで、いきなりひっぱたかれる危険は、回避できたな”
安心して、コナンは言葉を続けた。
「灰原、お前本当は、黒の組織を抜けたんじゃなくて、
妙な薬を作りすぎて追い出されたんじゃ・・」
コナンは最後まで、言葉を言う事ができなかった。
突然、右頬に激痛が襲った。
コナンは、両手で、右頬を抑えて、しりもちをついた。

「私には、”幻の左”があるのよ。忘れちゃったの？」
冷厳に、哀は言い放った。
「忘れるも何も、何なんだよ、それ」
コナンは一人つぶやいた。
哀の服のポケットから、携帯の鳴る音がした。
「ああ、博士なの？」
哀の言葉を聞いた途端、コナンは哀から携帯をひったくった。
「おい！博士！」
「おお、新一君。来とったのか」
博士の声は、狼狽していた。
「おい、博士。電話があるなら、何で、オレを真っ先に呼ばなかったんだよ。」
「お前さんを呼ぶと、大人を呼んで、結局、この騒ぎが外に漏れる。そうすれば、ＴＶ局とか来るじゃろう。
カメラに哀君が映っては、大変じゃと、思って、
ワシ達だけで何とかしようとしとったんじゃがなあ。
やはり、呼ばれたか。頼りにされておるんじゃな」
コナンは、博士が妙に自分のことを持ち上げようとしている口調が気になった。
「博士、灰原の事は、オレだって分かってる。
いまさら、言うことじゃあねえ。
なあ、博士、なんか、オレにまだ隠し事してねえか？」
「いや、それは、君の考えすぎじゃよ」
ふと、コナンは、灰原らしからぬ、大雑把な発想の、
この研究の真の発案者が分かったような気がした。
証拠は無い。カマをかけてみる。
「なあ、博士。
灰原は、自分で作った、って言ってたけど、この薬作ったの、博士だろ？」
慌てた様子で博士は答えた。

「いや、作ったのは、哀君じゃ。
ワシは、ただ、成長促進剤を作ってみたら、と薦めただけで。
解毒剤の開発に哀君、大分煮つまっとたんでのお。
しかし、さすがに哀君、すごい効き目じゃ」
コナンは、怒りが湧き上がるのを感じた。
「さすが、哀君、じゃあねえだろう」
コナンがなおも言葉を続けようとする前に、切羽詰った様子で博士が言った。
「ところで、ワシはいつになったら、ここからでられるんじゃ？
実は、トイレにいきたくなってきて」
「いいから、そこでしちまえよ」
怒りを抑えかねて、コナンは言った。
哀が携帯をコナンからひったくった。
「博士、我慢してよ。絶対そこでしちゃあダメ！
じゅうたんのクリーニング代って高いのよ」
携帯をポケットに入れた哀に、コナンは言った。
「いいじゃねえか、クリーニング代くらい」
「で、クリーニング屋さんに、博士がおもらししたって言うの？
ボケが始まったと思われて、発明品が売れなくなってしまう。
そうしたら、お金がなくなって、路頭に迷ってしまう。
そうなれば、すぐ、黒の組織に見つかってしまうわ。
それでいいの？」
「じゃあ、お前がやった事にしろよ。
小1の子供が、おもらしするのはそんなに珍しい事じゃねぇしな」
皮肉をこめて、コナンは言った。
哀の動きが止まった。
顔を伏せると、肩を振るわせている。
”やべえ、もしかして泣かしちまった？”
コナンは不安になった。
「おい・・・灰原？」

哀は、顔をあげた。
コナンが今まで見たことが無いほど明るい笑顔だった。
「な～んだ、工藤君。そうだったの」
コナンは哀がどういうつもりか、さっぱりわからなかった。
哀はうれしそうに言った。
「大～丈夫。平成のホームズが、小学一年生の時はおもらしさんだったなんて、
誰にも言わないから。
　さあ、がんばって、時計草刈ろうっと！」
　哀はコナンを後にして、猛烈な勢いで時計草を刈り始めた。
コナンは、しばらく、あっけに取られて動けなかった。
そして、慌てて、哀に呼びかけた。
「待て、灰原。お前日本語わかってんのか？
勘違いしてるぞ！
さっきのは、もののたとえだ。
俺は一年生になってから、おもらしなんかした事はねえ」
さくさくと、時計草を刈る哀には、コナンの声は耳に入っていないようだった。
　背後からの声に、コナンは飛び上がった。
「コナン、おめえ、学校でおもらししした事あるのか？」
元太の言葉を、コナンは慌てて否定した。
「そんなこと、あるわけ無いだろう！」
「あ、でも、失敗は誰にだって、ありますし」
コナンの言う事を、信じていない、曖昧な口調で光彦が言った。
３人の声に、哀は気がついたのか振り返り、明るく呼びかけた。
「小嶋君、根っこの方は始末できた？」
「ああ、だから、手伝いに来たんだ」
「じゃあ、後は、博士を救出するだけね。がんばりましょう」
　元気いっぱいの声で、哀は言った。
そして、鎌をふるって、どんどん廊下を進んでいく。

その後姿を見て、元太が言った。
「灰原って、俺のかあちゃんみてぇだ」
元太によく似たその母親の姿を思い浮かべたのか、光彦が不満そうに言った。
「似てませんよ、全然」
「カッコが似てるんじゃねえよ。
うちのかあちゃん、ちょっとだけ店が忙しい時はすごく機嫌が悪いんだ。
でもよ、すっごく忙しくなると、逆に機嫌よくなって、配達とか、ビシバシ片付けちまうんだ。
今の灰原、そん時の、かあちゃんに似てるな、って思うんだ」
光彦は、元太の言葉をきくとうなずきながら言った。
「灰原さんって、家庭的なんですね」
あまりに非論理的な結論にコナンは思わず声をあげた。
「おい、光彦。何でそうなるんだ！」
コナンの言葉に、光彦は不思議そうだった。
「だって、そうでしょう？」
「だって、って。だって、だって？」
コナンの思考は空転した。
「ったく、お前らぐちゃぐちゃ言ってないで、手を動かせよ」
元太が、哀に追いつきそうな勢いで鎌を振るいながら言った。
「あ、ここにも咲いてる」
朗らかな声に、コナンは振り返った。
歩美が両腕いっぱいに時計草の花を抱えている。
花は、その本体から切り離されながらも、ゆらゆらと、動いている。
コナンはあまりの驚きに声が出せなかった。
光彦が聞いた。
「歩美ちゃん。焼却炉の方は大丈夫ですか？」
「燃やせる物は、全部焼いちゃったの。
だから、みんなのお手伝いしようと思ってきてみたら、

お花が咲いてる事に気がついて。
本当に時計そっくりの、珍しい花だから、
B組の皆に持っていってあげようと思って摘んでるの」
「それは、いい考えですね」
光彦はうなずいた。
歩美はまとわりつく花を優しく腕から離し、摘み取った。
コナンはやっと、声が出せるようになった。
「あ、歩美ちゃん、その花・・・」
「コナン君。可愛いでしょう。すごく人なつっこいお花だよね」
「人なつっこい花・・・」
想像を越えた答えに、コナンの思考は完全に停止した。
突然、元太が不安げな声をあげた。
「おい、何かおかしいぞ」
コナンの思考は、再び動き出た。
周りを見回すと、時計草のつるや、葉がどんどん枯れていっている。
それも、普通の枯れ方でない。
見る見る茶色になると、自分の重みに耐えかねたように、崩れ落ちていく。
「ああ、お花が・・・」
歩美が、悲しげな声をあげた。
歩美の腕の中の花は、あっという間に、こなごなになり、塵となった。
「急激に成長した、リバウンドかしら？細胞の劣化が急速だわ」
元太が不思議そうに聞いた。
「どういう意味だ？灰原」
「急に、のびすぎた分、枯れるのも早いみたいね」
”最初から、そう言えよ”
コナンは思った。
「この分だと、手でも、つるの始末はできそうね。
きっとあと少しで、片付け出来るわ」

哀が言った。
「よ～し、少年探偵団。がんばるぞ！」元太の掛け声に、哀を含めた少年探偵団の皆は元気よく、こぶしを振り上げた。
もっとも、コナンの上げた手は、皆より、少し低かった。

6．『失われた世界』からの訪れ

時計草の始末は思ったよりずっと早く済んだ。
枯れてしまえば、箒と、掃除機だけで片付けることができた。
阿笠博士の寝室のじゅうたんも危機から逃れた。
片付けが済んで、蘭の焼いたクッキーでお茶にしようという事になった。
博士は、ほぼ一日閉じ込められていたので、広々とした所で、休みたい、と言った。
そこで、庭にキャンプ用のテーブルを出してお茶の時間となった。
「こんなに、穏やかな時が過ごせるなんて、朝起きた時には思っても見なかったわ」
哀が紅茶を口に運びながら言った。
「美味しいわ、このクッキー。
蘭お姉さんに作り方、教えてもらいたいわ。ね、コナン君」
歩美の言葉にコナンは力なく、うなずいた。
「コナン君、大分疲れてるみたいですね。大丈夫ですか？」
「おめぇ、午後からしかやってねぇくせに、体力ねぇぞ。
うな重もっと食べたほうがいい」
”バーロー。肉体的より、精神的に疲れてるんだよ”
コナンはすでに、言葉を口に出す気力を失っていた。
「あれ？玄関のベルが鳴ってるよ。私、見てくる」
歩美が、軽やかに、駆け出した。ほどなく、元気のよい声が聞こえてきた。
「佐藤刑事、高木刑事、一緒におやつ食べよう」
しかし、歩美に手を引かれてやってきたのは、高木刑事だけだった。
「あれ、佐藤刑事は？」
コナンがきくと、歩美はちょっと恥ずかしそうに答えた。

「お家の中に、用事があるんだって」
「用事って、どんな？」
重ねて聞くコナンを、軽蔑したように哀は言った。
「詮索好きもいいかげんにしたらどう？」
元太が大声を出した。
「分かった、ションベンだ」
高木が顔を赤くして注意した。「元太君、そういうことは、あんまり大声で言わないんだよ」
元太は、その理由がわからない様子だった、が、うなずいた。
「高木刑事、例の犯人は捕まったの？」
コナンの問いに、少年探偵団は身を乗り出した。
「コナン君のほうは、仲直りできたみたいだね」
コナンは苦笑いをした。
「まあね。じゃあ、まだ見つかってないんだ」
「なんだい、二人だけで分かっちまって」
元太が言うと、高木が答えた。
「今から話すよ。阿笠博士、お願いがあるんです」
高木刑事は、コナンに先ほど話した事を、簡単に皆に話した。
「で、我々は、ホームレスの溜まり場や、人のいない工事現場、公園、
と、寒川がいそうなところをさがしたんですが発見できませんでした」
「きっと、もう、電車にでも乗って、都内を出てますよ」
光彦が言うと、高木刑事は首を横に振った。
「寒川は、昔から、杯戸町か米花町にしか、居つかないんだよ。
それで、目暮警部がおっしゃるには、
こちらのお隣は、大分長いこと、空家状態になっているので、
もしかすると、寒川が、忍び込んでいる可能性がある。
という事で、一度中を調べさせていただこうと思いまして。
警部が、工藤さんの方に許可を戴いています。

鍵は、阿笠博士の所に預けていると、お聞きしましたので、鍵をお貸し下さい」
「ああ、ワシはかまわんよ」
その時、屋内から悲鳴が聞こえた。
明らかに女性の声と、男性の声だ。
「佐藤さん！！」
驚くほどの俊敏さで、高木は走り出した。
が、ほとんど走り出さないうちに、佐藤ともう一人の男にタックルされて押し倒されてしまった。
男の顔を見て、高木は叫んだ。
「お前、寒川！」
寒川は、警察に追われる身にも関わらず、高木の胸倉をつかんで叫んだ。
「た、助けてくれ！」
高木は目の前の状況が理解できず、行動を起こしかねていた。
佐藤も、高木の体にしがみついている。
そして、恐怖に満ちた視線で、背後を振り返った。
「高木君！何か妙な生き物が、家の中に居るのよ！」
コナンは不吉な予感を感じ、哀の方をこっそり盗み見た。
哀は、しごく、落ち着いた様子で、３人の大人たちを見ていた。
「とにかく、落ち着いて下さい。一体何が居るっていうんですか」
寒川がわめいた。
「化け物だよ！
この家は、知らずに入っちまったんだけど、化け物屋敷だったんだ。
昨日の晩、俺、どこに行ったらいいか、わかんなくって歩いてたら、ここの風呂場の窓ガラスが割れているのが見えたんだ。
つるみたいなもんが外に出てきてるから、妙な家だとは思ったんだけど、
隙間から入れるもんで、つい中に入っちまったんだ。
そしたら、家中、つるだらけ。

外に出ようとしたら、もう、窓は、つるが塞いじまっていた。
　仕方ないから、納戸に入り込んだんだ。
そしたらそん中に、でっかくて、ごそごそしたもんがいて、
逃げようと思ったら、納戸の戸も開かなくなって・・・。
俺、気を失っていたみたいだ。
　とにかく、今やっと、戸が開いて命からがら逃げてきたんだ」
「家の中に、つる草なんか無かったけど、
寒川の後を、妙な生き物が追っかけていたのは確かよ」
佐藤も言った。
”まさか”というように口を開こうとした、高木が動きを止めた。
視線は、少し離れた空中を見つめている。
高木の視線を皆が追った。
その先には、つややかに輝く、
平たくなった革靴のような物が、羽を広げて飛んでいた。
それはよたよたと飛びながら、高木の方にやって来た。
佐藤と、寒川は、高木から飛び退いた。
　そして、それは、半分墜落するように、高木の胸にとまった。
高木は、その物体をわしづかみにすると、しげしげと眺めた。
コナンからも、その物体のトゲだらけの足がわきわきと、蠢いている
のが見える。
高木刑事が、いつもの屈託の無い笑顔で、佐藤に話し掛けた。
「佐藤さん、大丈夫ですよ。ただのゴキブリです」
佐藤は恐怖のためか、驚愕のためか、硬直して声も出せない様だっ
た。
「あれを、ただのゴキブリね。高木刑事、意外と只者じゃあないわ
ね」
哀が興味深げにつぶやいた。元太がぼやいた。
「何だあ、でっけえクワガタじゃあねぇのかよ。
もし、そうだったら、デパートへ持ってって、うな重と交換できる
と思ったのによ」

歩美も残念そうに言った。
「ホタルかと思ったのに」
「あ、歩美ちゃん。本物のホタルは光彦にみせてもらったろう？」
やっとの思いでコナンは言った。
「でも、飛んでる時、あれ、光ってたでしょう。コナン君」
”確かに光ってた。
でも、光り方が違う。違いすぎるよ、歩美ちゃん。
光彦、本物のホタルを、歩美ちゃん達に見せようとした、お前の苦労は何だったんだ”
コナンは内心深く、光彦を気の毒に思った。
当の光彦は、歩美の発言に傷つく事も無く言った。
「ずいぶん大きいゴキブリですね。
そう言えば、地球温暖化の影響で、代々木公園に、
体長1メートルもあるヒルが生息するようになった、と父から、聞きました。
この、大きなゴキブリも地球温暖化の影響を受けているのかもしれませんね」
「円谷君、色んな事をよく知っているのね。
確かに地球温暖化は、様々な所に影響を及ぼしているのよ」
哀の言葉に、光彦はうれしそうに笑った。
”確かに、地球温暖化の影響は深刻だが、これは絶対違う”
コナンは心の中で叫んだ。
”犯人はお前だ！灰原！”
「バカヤロウ！いつまでそんなもん持ってやがるんだ！」
腰を抜かしていたはずの寒川がいきなり高木刑事の腕を叩いた。
どうやら、恐怖が頂点に達して、許容量を超えたらしかった。
巨大ゴキブリは、地面の上を這って逃げようとする。
それを、寒川は、すばやく踏みつけた。
ゴキブリは、半分体を潰されながら、まだもがいている。
そこに寒川は、ライターで火をつけた。

ゴキブリはあっという間に火に包まれた。
「油虫って言うだけのことはありますね。よく燃えています」
光彦は感心して言った。
ゴキブリの火が下火になってやっと、佐藤刑事は硬直状態から開放された。
それでも、高木の名を呼ぶのが精一杯といった、風情だった。
名を呼ばれた、高木も始めて、目の前で、ライターを持って座り込んでいる男が、
強盗殺人の被疑者である事が認識できたようだった。
「寒川次郎！強盗・・・」
寒川は、高木に最後まで言わせず、佐藤刑事の足元に這って行くと、頭を地面に擦り付け、哀願した。
「お願いだ！あんたも、刑事さんだろ！
あんたが逮捕してくれ！
あのゴキブリ男を、俺に近づけないでくれ！」
高木は、その言葉に深々と傷ついた様だった。
高木の心を癒すべく、３人の少年探偵団員達は、急行した。
周りに人がいなくなったのを幸いにして、コナンは哀に話し掛けた。
「お前、あのゴキブリ・・・」
「意外だったわね。
動物細胞には効かないと思ったのに。
生体に摂取される段階で、何らかの生化学的変化が薬品に起こったのかも知れない。
残念だわ、燃えてしまって。
体から、有効な成分が抽出できたかもしれないのに」「て、事は、もし有効成分が抽出できたら、
オレは元に戻るためにゴキブリエキスを飲まなきゃならなかったのか？」
「死ぬような事は、無いから試しても、よかったでしょう？」

哀は、薄く、微笑を浮かべた。
その笑顔に、コナンは、以前、ＡＰＴＸ４８６９の解毒剤を飲んだ時よりも、
死を身近に意識した。
ゴキブリエキスを服用し、新一に戻るか、
飲まずにコナンのままでいるか、
その究極の選択を回避させてくれた寒川次郎に、コナンは心の中で、深く感謝した。

終章．それぞれの夜

哀は、パジャマ姿のままで、ＰＣの前に座って、博士と話した。
「やっぱりこの薬に関しては、凍結するわ。
いささか、作用が不安定すぎるもの」
「そうじゃの」
博士はうなずいて言葉を続けた。
「じゃが、ＡＰＴＸ４８６９の解毒剤が完成したあかつきには、
この薬、もちっと、二人で開発を続けてみんか？」
解毒剤が、完成した後については、哀は何も考えていなかった。
いや、考える事が出来なかった。
むしろ、解毒剤が出来るまで、組織に”処理”されずにいられるか
どうか、
それさえ心もとなかった。
そんなことは、博士には言えない。
哀は、博士の言葉を無視しよう、と思った。
しかし、素晴らしいいたずらを思いついた子供のような、瞳の輝きに
、いつの間にか哀はこう答えていた。
「薬を完成させてどうするの？」
「そりゃあ、トロピカルランド顔負けのジャングルランドを作るん
じゃよ。
本物の巨大植物。乗ることの出来る、昆虫。
皆大喜びじゃ。入場料はざっくざく。ワシ達は大金持ちじゃ」
哀は、小さく笑った。
「じゃ、利益の取り分は、薬の主たる開発者である、私が８割と言
う事で」
「こりゃきびしいのお。６割に負けんかい」
「じゃあ、７割として、博士は、私がブランド買い漁りの旅に出る
ときの荷物持ち。これでどう？」

博士は、しばし考え込んで頷いた。
「よし！それで手をうとう」
ジャングルランドのことを考えると、哀は、なんだか楽しい気分になった。
哀は、未来を夢見ながら、眠りについた。

高木は空腹だった。
給料日前だと言うのに、思いもよらぬ出費があったからだ。
それは、背広のクリーニング代である。
たとえ、高木がゴキブリが止まったくらい、まったく気にならなくても、
佐藤刑事の厳命とあらば仕方の無い事であった。
寒川は、高木が近づくだけで怯えた。
そして、二度と人の家には侵入しないと、自分に近づくあらゆる人達に誓っていた。
”よほど、ゴキブリが恐かったのだろうが、それは、いいことだ”
と高木は思った。
その一方でどうにも不思議でならなかった。
”しかし、ゴキブリはそんなに恐ろしい物だろうか？
いくら大きくったってゴキブリはゴキブリ。
ヒルのように、血を吸うわけでもなし、ハチのように、刺すわけでもないのに。
あの勇敢な佐藤さんまで、何で、あんなに恐がるんだろう？
でも、まっ、いっか。佐藤さんに頼られてしまったもんね”
高木は地球温暖化に、感謝しつつ眠りについた。

歩美はベッドの中だった。
今日の出来事を思い出すと、自然と、笑みがこぼれてくる。

”今日は、とっても楽しかったね。
明日はもっと楽しいね、ハム太郎、じゃなくて、コナン君”
歩美は笑顔のまま眠りについた。

「おっと、忘れるところだった」
元太は、台所へよった。
冷蔵庫にマグネットで止めてある、給食献立表をチェックする。
「明日は、きなこ揚げパンに、ボルシチ、チーズ、冷凍みかんか。
よし！俺の好きなもんばっかりだ！」
布団に入った元太は、しかし、宿題は忘れたままで、眠りについた。

「光彦さん、もう遅いですよ」
母親の言葉に光彦は、パソコンの電源を落した。
「何を調べていらしたんですか」
「地球温暖化についてです」
「そうですか、感心ですね」
”これで、明日はまた灰原さんと、大人の会話が出来る”
光彦は、満足して、眠りについた。
コナンは疲れきって布団に横たわった。
コナンは、今までどんな事件発生に対しても、常に、冷静に対処できると信じていた。
しかし、今日のような事態に対しては、対応の想定外、だった。
それを思えば、少年探偵団の適応力にはつくづく驚かされる。
やはり、子供の方が、想像を越えた事態に対しては、精神の柔軟性があるのだろう。
ニセモノの子供の、自分とは違う。
だが、自分と同じ、大人であるはずの阿笠博士、灰原は落ち着いていた。

もちろん、自分達が原因だとわかっているから、だろうがそれだけではない、
とコナンは思った。
”科学者は、子供のような自由な発想が必要だって、
俺が、実験の失敗の文句をいうたび、博士は、言ってた。
つまり、『頭脳は子供』、なんだよなあ。”
しかし、灰原は、間違いなく自分と同じ
『体は子供でも頭脳は大人』だと信じ込んでいた。今までは。
しかし、今日の反応を見る限り博士と同じだ。
やっぱり、科学者って奴は・・・。
やれやれ、それで、唯一の大人であるオレが振り回されちまうわけか・・・”
自分は、体は子供でも、頭脳は間違いなく大人だと、コナンは改めて認識して眠りについた。

静かな夜だった。
夢は、昼間に体験した事が反映される事がある。
コナンは、悪夢にうなされていた。
同じ頃、本庁捜査一課強行犯三係の女刑事、
そして、杯戸町の強盗殺人事件の被疑者も、同じような悪夢にうなされていた。
　そのことは、お互いに知る由もないことであった。

（おしまい）

終章．それぞれの夜（後書き）

長々読んでくださった方、ありがとうございます。
楽しんでいただけたら幸いです。

そもそも、このお話は、いまは閉鎖されてしまわれた
某サイトで、新一が、コスモスの花の咲き乱れる場所に
蘭を案内して、そこで、プロポーズする、と言うお話を
読んだことから、出来た物語です。

そんな、浪漫に満ち溢れたお話から
なぜ、こんなお話になったかと言いますと、
「物語の背景が、コスモス、いいなあ。
でも、サクラもきれいでいいなあ。
でも、ちょっと平凡かな、サクラじゃあ散るしね。
・・・だからといって、これが、ラフレシアだったしたら、イヤかも（＾＾）。
しかし、これは、一般的な花じゃないな～。
一般的で、ちょっと変わった花かあ、
そうだ、家の近所に、時計草を生垣にしている家があったなあ。
しかし、時計草か、あの花、夜中に人をこっそり食べてるような
感じがするなあ～。
この前で、愛の告白はやめておこう」
と言うわけで、こんな話になってしまいました。あれ？？？
それでは、たわ言まで読んで下さってありがとうございｍ（＿＿）ｍ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2346a/

米花町奇談・・・巨大化編

2010年10月9日23時13分発行